

江戸時代の環境思想に関する覚書

西川 治

目 次

- I 水土の思想
- II 国土環境論の展開
- III 風土性の認識
- IV 開発と環境保全論
- V 子孫のために

I 水土の思想

日本における近代化の歩みは、そのはなばなしい成果のおかげに、いたる所で豊かな自然を荒し、美しい風景をそこない、貴重な文化財をこわしてきた。いまや、そうした近代化の傷あとをいやし、失われた自然の再生と病める風土の回復につとめるとともに、生活と経済活動との調和的繁栄をめざす快適な環境作り、清秀なる国土の修景に力をつくさねばならないときである。このような環境計画を策定するためには、ただ惰性的に欧米先進諸国に範をとり、借物の知識や理論を乱用するのはさけねばならない。そうではなくて、わが国における先覚者たちが残した教訓や業績をかえりみながら、外国の思想や技法なども適宜とりいれて、両者を高い水準で統一融合して、わが国情と風土にそくした方式を創出する必要がある。

こうした主張は決して新しいものではなくて、外来思想一辺倒をいましめる言説は、すでに江戸時代前期の実学的儒者たちによって述べられている。たとえば、山鹿素行（1622—85）は、赤穂流謫中48才の年に「中朝事実」という啓発的な日本国論を著述し、その序文において次のような深い反省を表明している。「われは中華文明の国に生まれて、まだその美しさを知らず、もっぱら外国の経典を読みなじんで、得意然としてその人物を慕うてきた。どうしてそのように心を放縦にまかせてきたのか。また、その志を失ってしまったのか。奇を好むためか、あるいは異なつためずらしさをたつとぶからであらうか¹⁾」この原文は簡潔で荘重な漢文で書かれていて、中朝とは日本のことである。引用文は佐々木（1978）²⁾ の訳によった。素行と同世代の

熊沢蕃山(1619—91)も、「集義和書」において、「いづれの儒学も此国の水土にあひがたく、今の時に叶がたし」と明言してはばからなかった。二人とも朱子学を官学として定めた幕府のしがめをうけて処罰されたことは周知のとおりである。

ところで、従来わが国で環境論の系譜について書かれた著作をみると、日本における先駆者たちの所論にふれた文献はきわめて少ない。その点で内田(1971)⁴⁾や辻田(1971)⁵⁾の著書は貴重な例外である。一方では日本人の自然観に関する著書は、最近刊行された斎藤正二(1978)⁶⁾の大著をはじめとして相当の数にのぼるだけに、環境論に関する研究が乏しいのは不思議なことである。本稿は、その穴うめに少しでも役立てばと願ひ、ひまひまに拾い集めた抜書を抄録しただけのものである。目を通したのは手に入りやすく有名な少数の著作に限られているし、農書の類は省いた。それでもいろいろと興味深い所見に接することができた。おそらく庶民的な地方文書の中には、経験に基づく風土的ないし生態的知識が沢山含まれているのではないかと思うが、それは今後の渉獵にゆだねたい。

ここで引用する環境論的見解は、今日からみればまだ素朴で、単線的あるいは短絡的であり、思弁的な性格から脱しきれていないとはいえ、一方では啓蒙主義的合理性や科学的説明に通じる要素もある程度含まれている。また今まで知りえたかぎりでは、江戸時代には「環境」という語の使用例は見あたらない。これに代る言葉として、もっとも多く用いられたのが「水土」であるが、これと類語の「風土」⁷⁾は佐藤信淵(1769—1850)が、その名著「経済要録」の中で何度も使っている。「環境」は「元史」の中で都市の周囲といった意味に使われているが、日本ではこれをenvironmentあるいはmilieuの訳語として誰が最初に用いたか知りたいところである。それはさておき、以下、江戸時代における環境論的所論を、国土環境論、風土性の認識、開発と環境保全論に分けて紹介してみたい。

II 国土環境論の展開

ポルトガル船の種子島漂着と鉄砲の伝来(1543)、キリスト教宣教師のシャビエルの渡来(1549)いらい、地球儀や世界地図、海外の地理的知識、西欧の文物思想、器物技芸などがもたらされると、日本人の視野は大きく世界に向って開かれ、古い三国世界像は克服されて、正しい地球観と新しい世界観がひろまっていく。世界的視圏の成立は、海外知識の追求心や貿易活動をいっそう強く刺激し、国民的自覚と国土の再認識をうながす。そして、世界の諸民族と風土を比較考量する能力をよびおこし、ひいては科学的批判的精神をはぐくむことになる。儒教にせよ仏教にせよ、いかなる聖教であれ、文物制度にせよ、それらを直輸入して、そのまま日本にあてはめる愚に気付き、外来文化の批判的吟味が行われる。こうした気運の中で、伝統的な唐・天竺に対する劣等感は軽減され、中世的な辺土思想や小国論は否定され、逆に日本上国論ない

し大国論が提唱される。その主張は、啓蒙主義的性格を示し、多かれ少なかれ地理学的ないし環境論的根拠に立脚している。

まずは山鹿素行の日本国論に注目したい。さきにあげた「中朝事実」には次のような意味のことが述べられている。すなわち、「四海の間において天然の優秀な国といえは、本朝と外朝(中国)だけであるが、中国といえども多くの点で日本の秀真には及ばない。第一に、中国の領土は甚だ広く、周囲は外国と国境を接し、守備隊を沢山おかねばならないが、かれらに心を許すことはできない。第二に、外国と近迫しているので長城や要塞を築かねばならず、そのために代人民を疲弊させる。第三には、守備隊が異国人と内通し、あるいは外敵に通じて内情を暴露することがある。第四には、匈奴とか契丹とかいう異民族が辺境を犯しやすい。第五には、しばしば王家が変わることである。それに比べると、日本こそ大地の中国であって、大海中に卓立し、その水土は万邦の中できわ立ってすぐれ、四時行われて寒さ暑さが順序正しく交代し、人物も世界の中では優秀であって、すべてが備わり過不足がない⁸⁾ というのである。これは一種の政治地理的見解であって、かなり正鵠をえた点もある。だが、日本こそ天地の中をえた中朝であり「それ中国の水土は、万邦に卓爾し、しこうして人物は八紘に精秀す」との名文句は、後の国粹主義者たちの愛唱するところとなり、遂には軍国主義者に利用されたのは残念なことであった。本来の主旨は、累代の劣等感をぬぐいさり、日本人に自信感を与えようとした啓蒙性にあった。

上記のような日本国の評価をさらに発展させたのは、長崎の天文・地理学者、西川如見(1648—1724)である。その好著「日本水土考」(1700年ごろの作、1720年に刊行)には、易経の思想を採用しながらも、近代地理学的説明も織りまぜながら日本大国論が開陳されている。それには素行の影響があるように思われる。中朝事実が津軽領内で秘密に出版されたのは、著作後10年ほどすぎた1681年ごろである。いうまでもなく素行は当時もっとも著名な学者にして兵法家であり、門弟数も枚挙にいとまがないほどで、没年の1685年の3月8日には松浦壱岐守に兵法を授けたりしている。如見が中朝事実を読んだが、あるいは間接なりともその内容を聞き及んだことは十分にありえると思われる。

さて、日本水土考の序文は、

「渾地萬国の図は異邦の著す所にして、地理の学は之によりて以てその水土を察せずんばあるべからざるなり。けだし萬国は各々自国を以て上国となして、しかも自国の説を用ひて自国の美を断ずる者は、未だ私称の偏あることを脱せず。故に今、異邦の図する所に従ひて以て此の国の美を察するときは、則ち私称の義にあらずして、実に此の国の上国たるの理を知れり。ここに於て、日本水土考を著して、以て同学に示す。いやしくも此の義を以て異邦人に談ずといえども、あに之を拒むことを得んや。」

と大そうな自信をもって書かれている。この本文では、まず世界の地理を概観し、日本国土の緯度経度を示し、国情の説明にうつる。すなわち、「日本は万国の東頭に位置し、陽気発生の始まる場所である。日本人は仁愛の心にとみ、勇武にして清麗潔白、礼儀に厚い国民である。日本を外国人が姫氏国と呼ぶことがあるのは、女帝を立てたことがあるからで、それも温和な水土自然の理に適しているのであろう。日本が神国であるのも水土自然の理によるもので、日本は清陽中正の国であって、世界は広大であるが、日本のように四季の区別がはっきりしている国は少ないのである。日本の経度は東西12度にわたり、南北の緯度は3度に及ぶ。これをインドやシナと比べれば小島ではあるが、世界には日本よりも小さい国は沢山ある。島国であっても日本は決して粟散国ではない。世界の周囲は日本東西経度の32倍ほどであるから、日本もまた大国である。しかし、国は広大だから貴いではなくて、四時の正偏、人物の美悪をもって、その貴賤を判定せねばならない。そもそも国土の広大な国は、その人情風俗も多岐にわたって統一しがたい。シナは聖国であるといっても、皇統が変乱して長く治めにくい。それに比べると、日本の範囲は広くもなく狭くもなく、その人事風俗民情が相ひとしく混一であって治めやすい。日本の皇統が不変であるのは世界中では日本だけであって、これは水土の神妙のおかげであるといわざるをえない。すなわち、日本の要害なることは万国にまさっている。日本の地は大国に近いが、灘海によって隔てられているので、遠くはなれているのと同じである。ゆえに大国に征服されることはない。」¹⁰⁾ (筆者訳)

こうしてみると、現在のわれわれの間でステレオタイプ化した日本国土観の原型は、素行や如見によって形成されたと思われるが、いつまでもこの域を脱しないとすれば、先人の叱責をうけても致し方あるまい。

ところで、江戸時代も後期になると、日本国論はいっそう誇大化する。それはやはり時代の動きを敏感に反映しているのである。すなわち、蘭書の解禁以後、諸外国の地理的事情は以前よりも知りやすくなり、一方では、1739年をはじめとしてロシア船が何度も日本の近辺に出没し、後にはイギリス船やアメリカ船なども来航して通商を求めるなど、各種の国際的トラブルが生じ、日本人の対外的緊張感、国防意識が高まった。それに関連して、伊能忠敬の蝦夷地測量(1800)を皮切りに、日本沿海実測の大業が進み、間宮林蔵の樺太探検などが行われ、世界における日本の立場の再検討が急務となった。こうした情勢下において啓蒙的役割を果たした学者の中でも本多利明^{11,12)}(1743—1820)の影響が大きかった。数学・天文学などを学び、蘭学をおさめ、海外の地理、経済事情、航海術等に明るく、開国、交易、北方の開拓と防衛の急務を強調した。その代表作の一つ「西域物語」(1798)には壮大な地政論が高い調子で述べられている。「日本の天下第一の最良国となるべき所以を論ずれば、神武以来凡一千五百歳の内漸々諸道も具足せしに乘じ、カムサスカの土地に本都を遷し、(赤道以北五十一度なり、エゲレスの都口

ンドンと同じ故に気候も相等し)西唐太島に大城郭を建立し(赤道以北四十六七度なり、フランスの都パリと同じ、故に気候も相同じ)山丹滿洲と交易して有無を通じ、……是を因縁として街道を開くに於ては、唐太島の繁昌は年を待たず隆なり、固より大国なれば日本よりも良国とならん、日本に未だ此土地を詳にせず、……土地の広大日本の倍ほどもあるべく、程慥はなけれども、大国たるは証拠もありて必定なり、金銀山は多くあるべく、如何といふに、佐渡の西北に所在して海路僅に二日程、渡海不案内の心根より見れば、遠国の様に思れんなれども、馴ば長崎よりは遙に近く、殊に国界なれば片時も急ぎたきは此事なり、……然ば捨置がたき土地なれば、是迄の運上屋を台とし、追々潤色を加へ、終には大都會の土地となり、大城郭も独出来すべし、カムサスカと此土地とに大都會出来すれば、其勢に乘じカムサスカより南洋の諸島も独開して、各繁昌の国々となるに従ひ、東都の御威光も隆になるより、アメリカ属の島々までも猶属し従ん、勢具足の日本島なり¹³⁾。この言たるや北夷先生と呼ばれた人だけに、まことに氣宇宏壯である。しかし一読して分るように、カラフトやカムチャッカなどの大きさや位置関係、そして緯度が同じであれば気候もまた相ひとしいと即断したことなど、利明の不明というよりは、当時の地理的知識や環境観の限界を示しているのである。それにしても、難しい国際環境をめぐる国策について、このように大胆な意見を吐露したのは、当時の鎖国下にあつては、まことに驚嘆すべきことであつた。利明が幕府や世間に訴えてやまなかつたのは、ヨーロッパの列強がいずれも高緯度の極寒の地にありながら繁栄した最大の理由は、外国との交易による富国政策にあるとの、そして土地の開発や富国の成否は決して土地の寒暖だけで決るものではないことであつた。それは利明の他の著作、「経世秘策」(1795)や「経済放言」などにおいても論証にこれつとめた点であつた。利明がこのような見識を、どのような蘭書を通じて抱くようになったかは知らないが、アダム・スミスの「国富論」が出版されたのは1776年であつたことを想起したい。利明が追求してやまなかつたのも富国への道であつた。

本多利明より25年後ナポレオンやA・フンボルトと同じ年に生れた佐藤信淵(1769—1850)になると、その日本国家論はいっそう比較論的にも進み、論旨も洗練され、規模も雄大になる。その傑作の一つ「経済要録」(1827)は、祖父の代から継承した経済之学、すなわち、国土を経営し、物産を開発し、蒼生を済救し、国家を富盛にする道であり、また世界の人類を済救する学問を体系立てた画期的な著述である。この総論には次のような日本の将来像が説かれている。「土地を領する者の天意を奉行し、国事を経営するに及では、上下の神祇皆悦で、此れを冥助する者なるを以て、国界の偏鄙なるも、土地の瘠薄なるも、患とするに足らず、気候の寒冷なるも、物産の寡少なるも害とするに足らず、假令ば西洋の魯西亜及び諸厄利斯等(イギリス)の諸夷の如きは、遠く北海の偏西に在て、其本国は共に北緯五十度より六十度の間に係り、気候甚だ寒冷にして、米穀も生ぜず、物産も多からざるに論なし、然れども彼二国の酋長等は、其食物も衣類

も無きを、経営の基根として、種々工夫を凝し、上下一致して国家の経済を勉強せしに因て、漸々国富み兵強く爲りて、今時には、世界に名高き富盛国と爲れり、予熟々彼二国の富盛に爲りたる事体を察するに、共に偏土の夷狄なれば、別に人に勝れたる智慮ありし趣きにも非れども、能其国を富強にせしことは、唯是政を立てるに簡なるを主として、無益の煩雑を省き、……、奢侈を警め、寛和を務め、国事の経営を勉励して物産を興し、交易を通じて互市の利潤を収めしか故のみ、……況や皇国の版図を按ずるに、西南は琉球諸島より、東北は蝦夷の辺境に至て、北緯二十四五度より四十八九度の間に係り、四方二十余度の海中に盤踞し、山水秀麗にして氣候良和に、土地膏沃にして物産豊饒なり、周回皆大洋に臨み、四通發達の要枢たり、航運甚だ便利にして、宇内を混同すべき基礎悉く備れり、若し夫れ時至り運応じて、海外を経略すること有らば、実に全世界の総主となるべき国なり¹⁴⁾」とまで言切っている。何やら大東亜戦争へかりたてたイデオロギーの元凶のような感じをうけるかもしれないが、上記引用文につづけて経済道の概略を述べたあと、その結語では、「若し夫れ天につかうるの本心も無くして、唯た妄りに其国を富すの策を立てる者は、皆是経済道の妖魔なり¹⁵⁾」と注意するのを忘れなかった。経済道の妖魔とはエコノミック・アニマルよりも厳しい言葉である。経済大国を自称する人士を、150年も前に予見して警しめた信淵の見識はさすがといわねばならない。

以上、素行から信淵に至るまでの日本論を寸見してきたのであるが、いずれの所説においても、自然環境決定論は影がうすく、むしろ人間の主体性や自発性を重んずる近代的環境論の色合いが現われているのである。

III 風土性の認識

時と所の限定を超越して普遍妥当する真理への道は、時空の観念的な否定によるのではなくて、その実証的克服の過程を経なければならない。科学的批判的精神は、特定の命題の性急なる一般化を許さないし、外来思想を鵝呑みにして、無批判的に受容する態度も否定するのである。地域的個性の重視、風土性の認識も、この精神の所産であり、自我意識と対応するものであり、文化的地域主義の発現であるともいえる。「すべて唐土より伝へたるわざも、此国にてはおのづから此国の気風に変化するがゆへに、つたへのままにては此水土のことわりにそむける理なれば、たとひもろこしより伝へし聖語なり共、此国にてはその学びの心すべき事なり、いはんや礼度器財文筆の風俗をや、此国にては此国のすがたを貴ぶべし¹⁶⁾」との意見は、まさしく批判的文化受容の重要性を説いたものであり、ここでいう水土とは単なる自然環境ではなくて精神的風土と理解してよいであろう。

地域的差異の重視は、国家間のそれにとどまらず、国土内の地方差にも向けられる。同じく如見著「百姓囊」には、「天の時の春夏秋冬は、日本六十余州同時なりといへども、東西南北、

地上の方位に従て、風雨雪霜、旱水寒熱温冷、をのをのひとしからず。此故に草木万物、みな同き事なし。すべて天氣の運行は、一樣なりといへども、大地に受る所に、はなはだ不同ありて、六十六国は六十六のかはりあり、深く心をつけて、をのをの応不応の子細を詳かに察すべし。一草一木を植るといへども、其地の方位を考ふる事なきときは、繁栄することなし¹⁷⁾』との適切な指摘がなされている。

ただし、水土のちがいに留意する必要があるといっても、それは決して環境決定論ではない。同じく「町人囊底拂卷下」には、次のような面白い個所がある。「淮南子に、『寒国は寿多く熱国は夭多し』といへり。是大体の説にして、今委しく考ふるに一偏にいひがたし。南天竺、莫臥爾国は暖国にて長命なる国なり。百歳を超たる者珍しとせず。其人質素の風俗ありて、静に噪しからず。鶏は食すといへ共、豚肉をば食する事を禁ず。按ずるに寿夭は国の寒熱による事なし。人の質素養性によれり。文華の風俗にて大酒肉食の大過に依て夭死するが故也。……

紅毛人其本国は北方寒国なりといへ共、じゃがたら国の大熱国に居住し本国の酒肉を大寒地の如くに食するがゆへに、紅毛人寿命五十歳に及べる者なし。多くは三四十才にて夭死す。本国は長命の国なりとかや¹⁸⁾』つまり、人の寿命の長さは寒熱の差によるのではなくて、むしろ食習慣に負っている。大事なことは気候に適した食制を選ぶことである。従って、大きく環境の異なる土地へ移住した場合には、もとのままの食習慣を墨守すると命をちぢめる恐れがあるというのである。これは気候馴化論のはしりといえる注目すべき所論である。

以上しばしば登場を願った西川如見は、日本で最初の世界地誌「華夷通商考」の著者として知られているが、風土論史もしくは地理的環境論史上でも重要な先駆的役割を果たした人物であるといえよう。

VI 開発と環境保全論

江戸時代には、国土の開発が盛んになり、城下町をはじめとして宿場町、門前町、港町などの都市が繁栄し、各種の産業が発達するとともに、一方では自然環境の破壊、環境の改変がしだいに目立つようになった。新田開発は各地で活発に行われ、とくに中後期にはそのための大規模な利水治水事業、干拓埋立事業も多くなった。新田の増加は山林原野の減少をきたし、建築材や薪炭材の需要の増大にあわせて、鉱山業や製塩その他の産業は大量に燃料を消費するようになり、山は荒れ、災害は激化し、景観がそこなわれるなどして、爲政者や実学者たちはその対策に頭を痛め、荒廃した山野水界の修景等は切実な問題になった。

熊沢蕃山のはげ山修復論は、その要請にこたえるものであった。それは1657年（明暦3年）ごろの著作「大学或問」に記されている。本書の写本の中には、経済弁とか経済活法要録といった題をつけたものがある。これからも推察されるように、本書は、経世済民の思想と具体案

を論じたもので、蕃山の政治、財政、農政、国防、土木、交易など広い分野にわたる考え方を
知る上で重要な著作である。この上冊の終節に次のような、生態学的といってもよいような、
はげ山修復策が記されている。「草木なきはげ山を林となる事あり。山の広さを積り、一度にな
らずば、一峰一谷づつもはやすべし。谷峰の広さによって稗を三拾石五拾石百石貳百石づつま
かせ、其上にかれ草・萱などをちらして置なり。諸鳥来て是を拾ふ。鳥のおとしまじりたる
木の実はよくはへるものなり。上にかれくさ稿草を置事は、拾ひにくきやうにして、鳥を久しく来さん
となり。其上雨に流れず、稗山土に生付きてもよし。かくのごとくすれば、三十年ばかりには
雑木のしげりとなるものなり。雑木茂りては、其近所の村里薪に事はかかざるなり。法をよく
立てば、次第に山茂りて永代薪沢山なり。……吉野・金剛山其外の太山どもの切あらしたる峰
谷には、杉・檜の実をまかすべし。……杉・檜ならびに雑木、山々に多き時は、夏は神氣盛に
なりて、夕立たびたびすべければ、池なくとも日損なかるべし。山茂りて山谷より土砂を出さ
ずば、川は一水一水に土砂海に落て深く成べければ、洪水のうれへもなかるべし。富有の大業
を生ずる事あげてかぞへがたし¹⁹⁾。」

鉱山の開発ならびに精錬業、不良な鉱山管理や廃坑がゆゆしい公害源になることは論をまた
ない。佐藤信淵は、鉱山業についても、父祖代々の蓄積に加えて、豊富な知見を誇っていた。
経済要録の巻の三から七までは開物上篇として、金属類その他有用鉱物について詳しく論じてい
る。その第四巻には、鉱山公害の実例をあげて警告している。「近来羽州の秋田は銀を出すこと
極て多きを以て、国勢頗る隆盛なり、又其隣国新庄には、極てよき銀山有て、数多の銀を出せ
しが、坑場の法律善を盡さざりしを以て、山崩れ水溢れて其業を爲すこと能はず、今は廢山同
様にて、土地甚だ衰微に及びたり、故に国家に長たる者は、開物の業に心を盡さずんば有るべ
からず、いささかも経済の要務を怠るときは国土は暫時に荒廢する者なり²⁰⁾。」

次に、大規模な土木工事を行う場合には、事前に十分実地を調べ、人為による自然の変化を
考慮し、不測の事態にも備える工夫が大事であると説いた教訓例を二つあげてみよう。これは
「二宮翁夜話」巻の二からの引用文である。「東京深川原木村に、嘉七と云者あり、海辺の寄り
洲を開拓して、成功すれば賣り、出来上れば賣り、常に開拓を以て家業とす、……其開拓の事
に付決し難き事あり、翁に実地の見分を乞う、翁一日往て見分せられ、其序彼の海岸を見らる
るに、開拓すべき寄り洲、四町五町の地は、数しらずあり、嘉七いわく、寄り洲は、自然にな
るといへ共、又是を寄する方法あり、其地形を見定めて、勢子石勢子杭を用ふる時は速に立寄
る物なりと、……嘉七又いわく誠に寄洲は天然の賜なりと、翁いわく天然の賜にあらず、其元
人為に出る物なり、……川に堤防あるが故に、山々の土砂、遠く此処まで流れ来て、寄洲附洲
となるなり、川口堤防なき時は、洪水縦横に乱流して一処に集らず、故に寄洲も附洲も出来ざ
るなり、されば其もと人為に成るにあらずや²¹⁾。」というのである。

その第二は、上記につづくものである。「三河国吉田の郷士に、高須和十郎と云人あり、舞坂駅と荒井駅の間に湊を造らんと企て、絵図面を持来て、成否を問ふ、翁いわく、^{きみ}卿が説の如くなれば、顧慮する処なきが如くなれ共、大洋の事は測るべからず、……かかる大業は、実地に臨むといへ共、容易に成否を決する可からず、況や絵図面上に於てをや、斯の如き大業を企るには、萬一失敗ある時は、斯くせんと云、^{ひかえつみ}和堤の如き工夫あるか、又何様の異変にても、失敗なき工夫がありたき物なり、然らざれば、卿が爲に賛成する者、共に成仏する事、なしとも言ひ難かるべし、然る時は、山師の誹あらん、予先年印幡沼、堀割見分の命を蒙りし時、何様の變動に遭遇しても、決して失敗なき様に工夫せり、たとひ天変はなくとも、水脉土脉を堀切る時は、必意外の事ある物なり、古語に事前に定まればつまづかずと、予が異変ある事を前に定めたるは、異変を恐れず、異変につまづかざるの仕法なり、是大業をなすの秘事なり²²⁾」

二宮尊徳（1787—1856）については、甚しく誤解したり、そのごく一面しか知らない人が多い。ところがオイルショックごろから、財政再建の教祖としてか見直され、官庁街にも金次郎ブームがおこっていると報じた新聞もあったほどである。金次郎は、小田原藩家老、服部家の財政整理で認められ、小田原藩主の肝入りで、その分家の野州桜町領の困難をきわめた財政立直しにも成功し、広く民衆の尊敬を集め、いくつかの藩の顧問役もつとめる身になった。ついに金次郎は56才の年に、時の老中水野忠邦に登用され、かの天保の改革の一端にかかわることになる。最初の任務は、「利根川分水路見分目論見御用」であって、印幡沼の視察を行ったのもそのころであった。尊徳は「夫我教へは書籍を尊まず、故に天地をもって教文とす²¹⁾」と常ひごろ語っていただけに、その自然観察眼はまことに鋭く、自然界の複雑な作用連関の把握につとめ、その知識を土木事業にも応用していた。かれの水利に関する土木的才覚が高くかわれたのも不思議ではない。その生涯にわたって復興に貢献した村の数は実に605の多きにのぼるといふ。偶像はこわしても、真相は究めねばならない。尊徳の遺業と思想とは、環境学、生態学的にも再検討する必要があると思われる。

V 子孫のために

西郷隆盛の遺訓の一つ「児孫のために美田を買わず」というのは、個人の独立心を重んじた近代的格言であるが、今や逆に、子孫のために美田を残す慮りが必要になったといわざるをえない。われわれには、美田のみならず、清らかな空気と水と、豊かな生態系と美しい風景の回復と保全をはかる責務がある。今は核家族化した時代であるだけに、後世の人へ住みよい環境を作り伝えねばならないと、義務感を喚起する必要がある。それにつけて思い出すのは“老僧が接木”という訓話である。これは、新井白石の推薦によって幕府の儒官となった室鳩巢の「^{すん}駿台雑話」(1732)に採録されている。「寛永のころの事になん、將軍家谷中わたり御鷹狩のありし

時、徒歩にてここやかしこ御過ぎがてに御覽ましましてけるが、此寺へもおもほえず渡御ありしに、折ふし其時の住僧はや八旬に及びて、庭に出でて、みずはぐみつつ手づから接木して居けるが、御供の人々おくれ奉りて、お側に二人三人つき奉りしを、中々やんごとなき御事をば思ひよらねば、そのまま背き居たりしを、“房主なに事するぞ”と仰せられしを、老僧心にあやしと思ひて、いとはしたなく、“接木するよ”と御いらい申せしかば、御笑ひありて、“老僧が年にて今接木したりとも、其木の大きくなるまでの命も知れがたし。それさやうに心をつくす事の不用なるぞ”と上意ありしかば、老僧“御身は誰人なればかく心なき事をきこゆるものかな。よくおもうて見給へ。今此木どもつぎておきなば、後住の代に至りていづれも大きになりぬべし。然らば林も茂り寺も黒みなんと、我は寺の爲をおもうてする事なり。あながち我一代に限るべき事かは”と言ひしをきこしめして、“老僧が申すこそ実にも理なれ”と御感ありけり²³⁾”という話しである。

今日、国際的スケールで環境問題を考えるとき、それぞれの国や地域によって、その発生理由や現象形態も大きく異り、一律には論じ扱いがたい。国際的利害の渦巻く資源産出国、膨大な人口をかゝえて工業化にはげむ国、人口過密でまずは食糧増産を急務とする国、工業化の質的転換を必要とする国など多様である。とくに、これから農業生産力の発展と工業化を推進しようとしている国々においては、それぞれ伝統のある文化的基盤を風土性に根ざした新しい発展のための理念と開発方式と技術体系とを創出せねばならない。そのさい、人々の生活体験と知恵と深い関係のある環境科学ないしは生態学とが、有効に適用されねばならない。こうした観点から江戸時代における生態的思想と環境技術、それらを支えている思想について研究し、さらには日本の近代化のプロセスを見直すことは、大いに意味のあることと思う次第である。

この小論を、教養学科の非常勤講師を勤められた竹内常行先生に心から感謝の意を表し、先生の古稀を記念して献呈致します。

参考文献と注記

- 1) 愚生中華文明之士。未知其美。專嗜外朝之經典。膠慕其人物。何其放心乎。何其喪志乎。抑奇乎。將尚異乎。夫中國之水土。卓爾於萬邦。而人物精秀干八紘。
- 2) 佐々木杜太郎(1978)：山鹿素行，明德出版社 pp. 157～158。
- 3) 熊沢蕃山：「集義和書」2版1676年（延宝4年）巻1 1義論の4の末尾に見える。本書の初版は（1672寛文12年，蕃山54才），正宗敦夫編，増訂蕃山全集第1巻（1978）所収，後藤陽一，支枝龍太郎校注「熊沢蕃山」日本思想大系3（岩波書店（1971），pp. 223
- 4) 内田秀雄（1971）：日本の宗教的風土と国土観，大明堂
- 5) 辻田右左男（1971）：日本近世の地理学，柳原書店。
- 6) 斎藤正二（1978）：日本の自然観の研究（全2冊），八坂書房
- 7) 佐藤信淵（1827，文政10年）：経済要録，巻の8開物中篇に「漢土には農政を論じたる書古今多から

- ずとせず、然れども風土も同じからず」とある。滝本誠一校訂，岩波文庫版，pp.111。
- 8) 中朝事実の中国章。塚本哲三編「山鹿素行文庫」(1928) 有朋堂書店， pp.220—222。
 - 9) 飯島忠夫，西川忠幸校訂，岩波文庫版 (1944) p13。(漢字の一部は書きかえ)。
 - 10) 同上， pp.20—26による。
 - 11) 西域物語の巻の中。本庄栄治郎解題「本多利明集」(1935)，近世社会経済学説大系，誠文堂版， pp.172—173。
 - 12) 内田秀雄 (1935)：地理学者としての本多利明，地理論叢 7， pp.1—30
 - 13) 佐藤直助 (1968)：西洋文化受容の史的研究，東京堂出版， pp.49—61。
 - 14, 15) 岩波文庫版， pp.13—19。
 - 16) 西川如見 (1719, 享保 4 年)：町人囊底弘卷下，飯島忠夫，西川忠幸校訂，岩波文庫版 (1942) p.137。中村幸彦校注「近世町人思想」日本思想大系，岩波書店，1975， pp.85—174。
 - 17) 百姓囊 (1731, 享保16年) 卷 2， 同上岩波文庫版， pp.172—173。
 - 18) 同上岩波文庫版， pp.133—134。
 - 19) 大学或問の上冊，「熊澤蕃山」日本思想大系30，岩波書店， pp.433—434。
 - 20) 岩波文庫版 p.65。
 - 21, 22) 二宮翁夜話巻の 2， pp.152—153。
 - 23) 大日本思想全集第 6 巻，(1932)， 先進社版

(引用文中いくつかの難しい漢字はひらき，また適宜現代式の略字に変えた。)

追記：その後，本多利明については，本庄栄治郎「日本経済思想史研究」下巻第 6 章 (1966年日本評論社) から，多くのことを知ることができた。本学部の早坂忠先生のご教示による。記して謝意を表する次第である。

A Note on Environmental Thought in the Time of the Tokugawa Shogunate

by

Osamu NISHIKAWA

Contents :

1. Thought of "Suido"
2. Evolution of the Environmental Explanation
of the Japanese Country
3. Understanding of Areal Differentiation
in Human and Climatic Characteristics
4. Thought of Development and Conservation
5. Consideration for the Future

The purpose of this paper is to elucidate some aspects of environmental or ecological thoughts in the time of the Tokugawa Shogunate, the Edo era (1603~1867). As the word corresponding to environment "Suido" (water-land) was used in the early period, besides it "fudo" (wind-land) was applied in the latter period. Under the great influence of Buddhism in the medieval ages Japanese held the image of a limited world consisting of only three countries, China, India and Japan. In this image Japanese islands, so many small and scattered like millet seeds, were regarded as oriented in the far margin of the world. After the contact with European and their culture, however, a global thinking began gradually to spread out. It caused a new estimation of Japanese country in comparison with the others, more or less based on geographic knowledges of the world. In this way, for instance, a very influential Confucian, YAMAGA SOKO (1622~85) stresses that Japanese country is prominently situated in the central part of the world, and endowed with every excellent and well balanced features. He makes effort to explain how Japan is far better in many aspects than China, very big and also a central country, but being unstable due to its own political change and threatened by barbarians along the very long extended frontier. It seems that this opinion was succeeded by a famous as-

tronomer and geographer, NISHIKAWA Joken (1648~1724), though he was not a pupil of YAMAGA. He lived in Nagasaki and was a cosmopolitan minded scholar, far more informed of foreign affairs than those in another regions. Besides the oldest world geography in Japanese he wrote many books of which "Nihon Suido-Ko", a environmental consideration of Japanese country was an excellent essay. In this he demonstrates more reasonably than Yamaga that Japan is accounted for a large country in the world as she stretches for a space of twelve longitudinal degrees from east to west, ruled easily because of a homogeneous and cultivated nation, protected in safety by the surrounding sea and characterized by the regular changes of the seasons. This view of Japan as a large power was presumably derived from a reactionary sentiment against the traditional inferiority complex to China and India.

In the latter Edo period the view of Japan as a large country was moreover emphasized by scholars such as HONDA Toshiaki (1743~1820), and SATO Nobuhiro (1769~1850). The former, one of the most learned political economist and geographer at that time, had a mercantile thought and advocated passionately for the importance of the reclamation of Karafuto (Sakhalin) and Kamchatka and for the necessity of foreign trade, in his various writings such as "Keisei Hisaku", Confidential policy for State Affairs, (1795), "Seiiki Monogatari", A Story of Western Countries (1798). According to his opinion, when those plans would be realized, Japan could become a leading country like England and France, because Japanese land was climatically, for instance, far more favored than the two countries. After him SATO Nobuhiro, a great political economist and practician insisted in his concised book "Keizai Yoroku", An Economic Digest (1827) insisted, that Japan should become the chief suzerain of the world, if the government would operate appropriately and execute effectively land development and promotion of industries, for Japan was possessed of beautiful landscape, mild climate and fertile soils, surrounded by ocean and located suitably for shipping.

Concerning the recognition of areal differentiation in nature, people and culture some noticeable views are included in the writings by YAMAGA Soko, KUMAZAWA Banzan (1619~91), and NISHIKAWA Joken, etc. They point out that it is wrong and misleading to accept uncritically any foreign doctrines, thoughts, institutions, etc., for every country is equipped with peculiar physical and historical conditions. Among them NISHIKAWA excites most clearly attention to locational differences in climate and soil for

planting crops and building houses. Ideas and technics for conservation and restoration of nature also appear in that time. For instance, Kumazawa proposed a unique process to recover a bare hill with the help of wild birds. SATO Nobuhiro gave warning against the destructive development of mines. NINOMIYA Sontoku (1787~1856), a prominent consultant for financial reconstruction and civil engineering, as well as the moral and economic teacher, demonstrated his many-sided abilities including the sense of environmental assessment.

It is well known that the population in the Edo period amounted to almost thirty millions. Therefore, it may be certain that during that feudal time almost all possible attempts were carried out to sustain living of people in the so densely inhabited mountainous country of the island ecosystem under the national isolation policy. There must be contained many suggestive ideas and wisdoms to survive in this limited earth.